

## 活動報告

# 大規模授業におけるアクティブラーニング

## —平成28年度商学部FD講習会報告—

竹村 亮\*, 金 雲鎬, 岡田 太, 菅野正泰, 芝村 良, 服部訓和, 根田正樹

日本大学商学部

本稿では、「大規模授業におけるアクティブラーニング」をテーマとして開催された平成28年度商学部FD講習会と、その際の配布資料の改訂版を紹介する。

キーワード：アクティブラーニング, グループワーク・グループディスカッション, LMS, eラーニング

### はじめに

アクティブラーニングという言葉は誤解を招きやすい。とくに、その目的が忘れられ、世間一般で言われているようなアクティブラーニングの手法のみがひとり歩きしている感がある。ここでは、松下や溝上（松下, 2015; Bonwell & Eison, 1991; 溝上, 2014）を参考に、アクティブラーニングとは、

- 聴いたり調べたりすることを通して知識を獲得し、
- それについて自身で考察することで知識を内化し、
- それを自身の言葉で発表・表出しながら知識を外化する学習

であると考える。

確かに、アクティブラーニングでは、これまでの知識の内化偏重の学習に対する反省から、話す、議論する、書くといった発表・表出活動を通して、知識を外化する活動に眼目が置かれる。しかしながら、初等教育ならともかく、単に何らかの「活動」をとり入れた学習がアクティブラーニングというわけではない。自身の考察を経て、「知識の外化を目的とした」発表・表出活動を伴う学習がアクティブラーニングなのである。

このような学生のアクティブラーニングを実現するためのアクティブラーニング型授業を、溝上（溝上, 2014）はその技法と戦略の観点から以下のようなタイプに類別している。

タイプ1：コメントシート・ミニッツペーパー、小レポート、小テスト、演習の実施等。

これらは教員主導で比較的講義中心型であり、それほど綿密な計画・戦略を必要としない。

タイプ2：ディスカッション、プレゼンテーション、体験学習等。

これらも比較的教員主導で講義中心型であるが、ある程度の計画・戦略が必要となる。ただし、タイプ1と比べて、学生主体の学修へと視点の移行がなされている。

タイプ3：協同・協調学習、調査学習、ディベート、LTD（Learning Through Discussion）話し合い学習法、ピアインストラクション、PBL（Problem-Based Learning）、PBL（Project-Based Learning）、

\*E-mail: takemura.ryo@nihon-u.ac.jp

投稿：2017年1月10日

受理：2017年2月6日

チーム基盤学習、発見学習等。

これらは学生主導型の授業であり、教員側には綿密な計画・戦略が必要となる。

上記に加えて溝上は、タイプ0として、授業中の話し方や板書、スライドの工夫などを挙げている。これらの技法も、やり方によってはアクティブラーニング型授業の一種と考えることもできる。

より高次のアクティブラーニング型の授業を行うためには、教員の側に大きな意識の変革が必要となる。伝統的な講義形式の授業では、教員は知識を伝える役割をおもに担っていたのに対して、アクティブラーニング型の授業では、教員はおもにファシリテーターの役割を担うことになる。知識の伝達役から、学生が自身で考え学びそれを表現するための補助役、学生の自発的な学習・考察を促す誘導役へと、教員の役割が大きく変わることとなる。このような意識の改革を単独で行うのは勇気のいることであり、一般には非常に難しい。

しかしながら、本学商学部にはさいわいアクティブラーニング型の授業をすでに取り入れ、展開している教員が少なからずおり、それらの取り組みはこれまでもさまざまな機会に紹介されてきた。さらに、2016年6月末に商学部において実施されたアクティブラーニングに関する授業改善アンケートの結果からも、アクティブラーニングを含めた授業改善に対する教員の意識の高さがうかがえる。(商学部の授業改善アンケートについては後述の根田の項を参照。)そのような状況のなかで、2016年11月17日、商学部学務委員会・商学部教育改善委員会・日本大学理事長特別研究(アクティブラーニングのためのLMS研究グループ)の主催により、「大規模授業におけるアクティブラーニング」をテーマとした講習会が開催された。講習会の講演者は、すでにアクティブラーニング型授業を展開している商学部の教員である。各講演者の発表内容は以下のようなものである。

### 1 金雲鎬「アクティブラーニングのための授業構成—考える授業を目指して—」

特別な機材は使わなくても、授業の構成を工夫することによってアクティブラーニングは実現することができる。(1)与えられたテーマについて考察し、(2)小レポートとしてまとめる。(3)その小レポートを発表させ全体でディスカッションを行う。この(1)～(3)のサイクルを1回の授業のなかで2度、講義・解説の前と後に回すことにより、学生の知識の内化、考察、知識の外化の過程を実現することができる。

### 2 岡田太「大人数授業でのグループワーク・グループディスカッションの方法」

グループワーク・グループディスカッションは、教員からの一方的な知識の伝達ではなく、調査作業等を通じて学生自身に知識を獲得させ、それをグループ内で発表することで知識を外化・共有する方法である。ここでは、学生自身が知識の伝達役をも務めることとなり、教員はファシリテーターとしての役割をおもに担うこととなる。(教員は決して楽ができるわけではない。いつも以上の準備が必要となるのは言うまでもない。)

### 3 菅野正泰「LMSを活用した授業理解力の向上」

LMS(Learning Management System: 学習管理運営システム)はすでにほとんどの大学で導入されており、レポート管理や演習の実施等に広く活用されている。LMSはアクティブラーニングに限らず教育一般において、教員にとっても学生にとっても必須のツールとなっている。とくに大規模授業においてLMSは重要な役割を果たし、本学にも必要不可欠なものである。(が残念ながら今のところ本学にはまっとうなLMSは導入されていないのが現状である。)

以下の発表では、日本大学理事長特別研究「日本大学におけるeラーニングの戦略的活用の研究」および

「自主創造型パーソン」の育成を目標とした全学共通教育における効果的なアクティブ・ラーニング開発に関する研究」を通して得られた知見に基づき、とくにアクティブラーニングのためのLMS Glexa（グレクサ）の活用方法が紹介された。（服部，2016；芝村，2016；竹村，2015；竹村，2016）等を参照。）

#### 4 芝村良「LMS Glexaによる学習管理—経済統計学1・2の事例紹介—」

学習意欲の維持・向上のためには、教員から学生へのフィードバックとメンタリングが重要となる。LMSをうまく活用することによって、比較的容易に課題ごとの「成績」と「受講姿勢の相対評価」を学生に随時フィードバックすることができる。これによって、学生一人ひとりに、各段階での自身の「理解度」と「学び方（学習態度）」について自己点検させることで、学習意欲の向上をはかり、能動的・自律的な学習に導くことができる。

#### 5 竹村亮「eラーニングによるリメディアル教育（数学A）」

本来は高等学校で習得すべき知識であっても、学生のさまざまな入学形態の違いや学生個々の学習意欲の違い等によって、学生の知識は一定ではない。それを対面授業で補足していると、それだけで授業時間が終わってしまうことにもなりかねない。そこで、授業に必要な基礎知識をeラーニングで自習させる。プリントや書籍と異なるeラーニングの主なメリットは、LMSで学習状況等を随時チェックできることである。これにより、対面授業ではその基礎知識を前提とした発展的授業やアクティブラーニング型授業を展開することができる。

#### 6 服部訓和「eラーニングシステム Glexa を用いた日本語アカデミックライティング」

あくまで対面での指導がメインであるという観点から、それを補うためのツールとしてLMSを活用する。とくにLMSによってレポート等の一括管理が可能となり、それに関わる作業コストを大幅に削減することができる。また学生にとっても、LMS上の学習記録や提出課題のデータはそのままラーニングポートフォリオとして活用できる。とくにLMS Glexaは、フォーラム機能など種々の機能を有しており、リアルタイム相互添削（教員による添削より効果が高い）等も可能である。

以下ではまず、上記商学部FD講習会の開催に至った背景を概説し、今後のFDの課題について議論する。続いて、講習会での配布資料の改訂版を紹介する。

## 講習会と運動としてのFDの課題

根 田 正 樹

### 1. 二つのアンケート

商学部において「大規模授業におけるアクティブラーニング」と題する講習会が企画・開催された背景に二つのアンケートがある。一つは学生による授業評価アンケートであり、例年、前学期末および後学期末に実施しているものである。他の一つは「平成28年度における授業の運営等」に関するアンケートで、講義科目を担当する教員を対象として行ったものである。当然のことながら、前者は授業を受ける立場からのものであり、後者は授業を行う立場からのものであるが、両者の質問事項には「授業への能動的参加」という共通の項目が形を変えて用意されている。これに対する回答には両者の思いに随分と「ずれ」が見られる。

このずれを捨象したままでは、どんなに優れた研究をしている教員であっても、授業の目的を達成できないことは明らかであり、とりわけ大規模授業ではより深刻なものとなる。教育改善委員会は、こうした問題意識のもとに、アクティブラーニングを意識した授業を行っている同僚教員のなかから協力者を得て講習会を開催したものである。ここでは、最初に二つのアンケートに見られる「ずれ」を紹介し、FDに関わる課題に言及することとする。

## 2. 学生の授業評価アンケートにみる授業への能動的参加について

授業評価アンケートの「授業は全体として充実したものであったか」という質問について、「強くそう思う」「そう思う」と回答する学生は70%を超えており、多くの学生が出席・受講している姿勢が窺われる。他方で、「授業内容は、あなたにとってどのようなレベルでしたか」の質問については、「難しかった」が21.83%、「やや難しかった」が50.72%となっており、両者を合わせた回答は70%を超える。

3分の2を超える学生が授業は難しかったと回答しているが、「この授業科目を1回受けるに当たり、授業時間外で学修（予習、復習、課題等）にどのくらい取り組みましたか」という質問については、まったく取り組んでいないが31.16%という回答を示している。授業の難しさと学修をしないこととの関係は明らかではないが、その後の学修意欲に大きな影響を及ぼす可能性が少なくないともみることできる。ちなみに「この授業を受けるに当たり、図書館をよく利用しましたか」という質問についても、「全く利用していない」という回答が60.03%にのぼっている。

アンケートでは、担当教員が学生に対して授業へ積極的参加を促すための方策を講じたかどうかに関する質問も用意した。しかし、回答からは教員の講じた方策が十分でなかったり、もしくは教員の意図が十分に伝わっていないことを窺わせた。すなわち、これを列挙すると以下の通りであった。カッコ内の数字は「そう思う」と回答しなかった学生の割合である。

- ・この授業科目に関し、授業時間外（授業終了直前を含む）に、担当教員に質問などをしましたか。（63.08%）
- ・この授業科目に関し、授業時間外に学生間でともに学修しましたか。（56.68%）
- ・この授業を通じて自分の考えを表現・発表する力が伸びたと思いますか。（51.01%）
- ・この授業では、学生の発言など授業参加の機会が多かったと思いますか。（50.68%）
- ・授業時間外の学修（内容、方法等）について、担当教員から具体的（シラバスに明記を含む）に示されましたか。（40.20%）
- ・レポートや小テスト等の課題に対し、担当教員から学生へのフィードバック（評価や講評等の開示）はありましたか。（37.76%）
- ・この授業を通じて考える力が伸びたと思いますか。（36.56%）

## 3. 教員を対象とした授業改善アンケート（回答した専任教員61人）

教員を対象としたアンケートでは、まず「先生の授業では、どのような工夫をされていますか？その工夫を教えてください。以下の選択肢から当てはまる番号を「複数」選んで○を付けてください。」という質問であるが、これに対する回答のうち、上位5項目を挙げると、次のような結果が示された。すなわち、①講義資料の工夫（78.7%）、②小テスト（55.7%）、③理解度チェック（44.3%）、小レポート（44.3%）、プレゼンテーション（44.3%）、④グループディスカッション（39.3%）、⑤コメントシート（32.8%）、グループワーク（32.8%）である。この後、ディベート、反転授業、ブレインストーミング、問題解決学習などが続く。

次いで「今後取り入れてみたい工夫について、不安や課題に感じることはありますか？以下の選択肢から「複数」選んで○を付けてください。」という質問である。これに対する回答のうち、上位5項目を挙げると、次のような結果が示された。すなわち、①受講者が多すぎる（47.5%）、②機材や設備（18.0%）、③準備

が大変 (13.1%), 一人では大変 (13.1%), ④評価 (9.8%), 進め方 (9.8%), ⑤教室整備・手配 (6.6%) の順である。

このアンケート項目では教員の抱える不安や課題として受講者が多すぎるのが第1にあげられている。そこで、商学部における大規模授業をみると、平成28年度前学期における受講者数100名以上の講義数は187である。その内訳を受講者数の階層順に整理したのが次の表である。

表1 受講者数階層順大規模授業数

受講者数	前学期科目	通年科目	計
101人～200人	87科目	10科目	97科目
201人～300人	54科目	4科目	58科目
301人～400人	28科目	2科目	30科目
401人～518人	2科目		2科目
計	171科目	16科目	187科目

#### 4. アンケートから想像される大規模授業の風景

これらの大規模教室で受講する学生数と先に紹介した学生および教員のアンケート結果を重ねると、次の授業風景が想像される。

学生の多くは授業に出席し受講しているが、そのうちの70%の学生は授業が難しいと感じている。原因は別として30%の学生は予習や復習を全くしていないし、比較的多くの学生は教員に質問もせず、また友人と一緒に勉強することもなく、学修に能動的に参加しないままに終わっている。

一方、教員の多くは学生に授業内容を理解させようと、たとえば配布する講義資料に工夫を加えたり、小テストなどで学生の理解度をチェックしながら授業を行っている。プレゼンテーションやグループディスカッションなど学生の授業参加を促す工夫をする教員もいる。しかし、受講者が数百人に達する授業を複数担当している場合には、理解度をチェックしながら授業を行おうとしても、それをカバーするための機材や設備が十分でなく、またTAなどの補助者もいないことから、単独で学生を能動的な学修へ導くことが困難である(机上に300枚くらいのチェック用紙の束が二つ三つ上がっていることを想定されたい)。このため、一方的な授業であることを承知しながら、また思うように効果が上がらないというもどかしさを憶えながら、シラバスに従って授業を行っているともみることができよう。

#### 5. 講習会と運動としてのFDの課題

これまでも学生の意識状況は授業改善アンケートによって把握されてきた。しかし、学部や教員が手をこまねいては学生の意識状況に変化は生じないが、教員が変化すれば、学修に対する学生の意識も変化することが期待できる。すなわち学修に関心のある学生はその関心をより一層深めるであろうし、関心のなかった学生は関心を持つようになる。しかし、そうなるためには克服されなければならない2つの問題がある。

第1は教員が変化できるかどうかである。これまで教員のFDに関する意識や実態を把握する調査はなされてこなかった。教員について、ともすれば研究のみを重視し、FDについては一部の関心のある教員を除いては頓着していないという理解が一般になされているが、この度のアンケートを見る限りは、その理解は偏ったものといわざるをえない。多くの教員は、既述のようなもどかしさを憶えながら授業を行っている。そのもどかしさは、教室での問題を自分だけのものとして捉え、教員間においての問題意識の共有化が図られていないという、いわば孤立化に起因するところが少なくないともみることができよう。

第2の問題は大学が変化できるかである。大学であっても、授業の規模は小さければ小さいほど教育効果が上がることは論を俟たない。しかし、経営上の要請から一定数の学生は確保せざるをえないことから、大規模な授業の出現を避けることはできない。そうした中で、学生を能動的な学修に導き、教育の質的向上を図ろうとした場合、その役割を担当教員の個人的技量のみ任せようとするのは目的達成という観点からは現実的ではなく、大学も「もどかしさ」を感じる教員の声なり要望を具体化する方向での支援が必要とされよう。つまり教員の教授する環境の整備がFDの向上につながるという側面があることを認識する必要がある。ちなみに、商学部では授業内容を学生に伝えるための道具、例えば黒板、プロジェクター、配布資料の印刷機などは用意されているが、学生からのリアクションは用紙に頼るという昔ながらの方法しかない。このため、講習会では、他大学に出講している教員より、大規模授業へのLMSの導入について本学は周回遅れであるとの指摘があったことを付言しておく。

こうした状況を踏まえ、教育改善委員会は、学務委員会と共同で、そして平成28年度理事長特別研究「アクティブラーニングのためのLMS研究」に従事し、すでにGLEXAという学習管理システムを実証的に使用している教員の協力を得ながら、「大規模授業における能動的学修」をテーマとし、授業の多様な運営方法を相互に開陳し合う講習会を企画・実施したものである。そうすることにより「ずれ」や「もどかしさ」の共有化を図り、そこから一步踏み出していくという、いわば運動としてのFDプログラムの狙いがあるといえてよい。もとよりFDに関する文献を研究したり、識者の講演を行うことも意味はあるが、しかし、同じ教室で、同じ学生を対象として行われている他の教員の授業方法を認識し合うことにより、一層実際の、現実的な授業の改善を図ることができるといえよう。

なお、本講習会には専任教員の半数が参加したが、終了後、会場をパソコン教室に移し、理事長特別研究「アクティブラーニングのためのLMS研究」に従事しているスタッフがGLEXAの操作に特化した講習会を開催したところ、14,5名の教員が参加した。また当日参加できなかった教員からも開催要請が寄せられている。こうした活動が運動としてのFDの成果といえることができ、今後も同様の活動をアクティブに行うことが期待されるといえよう。

(注)本文中、意見にわたるところは私見であることをお断りする。

## 1 アクティブラーニングのための授業構成—考える授業を目指して—

金 雲 鎬

### ① 当該授業名

商学 I

### ② おおよその参加学生数

200人

### ③ 目的

目的 (1) 「学習側面」: 商学の基礎・基本知識を身に付けること

目的 (2) 「学習以外」: 考える力を鍛える, 対話力を高める, 学生のモチベーションを高める

### ④ 事前準備・必要機材等

授業時間 (90分) でどれだけ学生の知識が伸びるかをイメージしてから授業に臨むことが重要

## ⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

(1) 授業の目的と流れ説明, 前回授業の簡単な復習 (授業開始～10分)

(2) 考える時間&ディスカッション時間 i (10分程度)

・その日の授業内容の中で最も重要な内容について, 説明に入る前に考える時間を設ける (5分程度)

\*注意: 考えたことを書かせることが重要

例) 「流通の機能」がその日のテーマの場合は, 「流通とは何か, また流通において商業者はなぜ存在するかについて考えて, 簡単に書いてください」

・考えたことを発言させて, ディスカッションへ誘導 (5分程度)

\*注意: 発言していない人に発言の優先権を与える

例) 考えの時間に教室を巡回しながら, よい(?) 答えを書いている学生2～3人に, マイクを回すことを付けておく。そしてディスカッション時には, まずこの2～3人に発言してもらい, それをネタに全体学生にまで発言を広げる

(3) 講義・説明 (60分程度)

(4) 考える時間&ディスカッション時間 ii (10分程度)

・iで学生が書いた内容を修正させる。知識の伸びを目で確認させる。

例) 「講義・説明した内容を参考にしながら, (2) で書いたものを添削して, みなさんが思う正解を書いてみてください」

## ⑥ 実施する上での留意点

- 授業時間に必ず考える時間を設ける
- 考えるネタを用意する
- 考えたことを書かせる
- 同じ人だけが発言しないように工夫する (発言していない人に発言の優先権を与えるなど)
- 知識がどれだけ伸びたかを比較させる
- 活発な発言を誘導するために, ディスカッションに入る前に何人か発表者を決めておく

## ⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

- 学生にとっての利点
  - 考える機会が増える
  - 発言の機会が増える
  - 知識がどれほど伸びたかが目で確認できる
- 教員にとっての利点
  - 学生の理解度がリアルタイムで確認できる
  - 学生とのコミュニケーションの機会が増える
- 学生の集中度が高まるために私語の対策にもなる

## 2 大人数授業でのグループワーク・グループディスカッションの方法

岡田 太

### ① 当該授業名

保険論 I

### ② おおよその参加学生数

167名 (2016年度)

### ③ 目的

- アクティブ・ラーニング
- グループワークによる調査、発表、討論を通じて発展学習を行う
- 作成したレポートのフィードバックの代わり
- 居眠り防止、学生に汗をかかせる

### ④ 事前準備・必要機材等

作成したレポート、2～3の教室（討論できる環境の確保）

### ⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

- 第1週、グループワークの告知、グループ分け（4～5人）課題を明示し、選択させる（15～20分）  
自殺統計の分析、自殺実態・原因の分析、自殺対策の現状と課題、自殺と生命保険
- 第2週、計画書の提出（A4用紙1枚）  
（1）サブテーマの設定、（2）構想（200字）、（3）キーワード、（4）目次と担当者の氏名、  
（5）参考文献リスト  
授業内に説明させ、必要に応じて修正のうえ提出（60分～）
- 第3週、次回発表の準備（15～20分）
- 第4週、2～3つのグループ毎に分け、発表、質疑応答を行い、終了後、レポートとワークシートの提出（90分）  
レポート 10,000字～（図表込みで1人あたり2,500字から3,000字が目安）  
ワークシート（A4用紙1枚両面）各評価項目につき4段階評価、報告の概要、良かった点、改善点、  
討論のポイントや質疑応答、今後の課題

### ⑥ 実施する上での留意点

- グループワークへの参加を平常点として加算する
- 期末試験で関連問題を出し、学習効果の定着を図る

### ⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

- 授業への参加、居眠り防止
- 共働作業を学ぶ
- 重要ではあるが、敬遠されがちな課題への取り組み



- 他の学生の意見や考えを学ぶ良い機会
- どの程度学習効果があるかは不明だが、講義を聴くだけよりは良いと学生は感じているようである(過去のアンケート調査より)
- グループまたはグループ内の意識差
- 脱落する学生が若干名いる
- 講義時間の実質減少

参考：2016年度の発表組み合わせ

保険論Ⅰ グループワーク発表組み合わせ

	教室	組み合わせ	担当者	サブテーマ	テーマ
1	1603	A	清原、古川、片岡、岩崎、加藤	自殺を減らすには今、何をすべきか	自殺の原因・実態
2	1603	A	平賀、森田、堀口	自殺をする人の特徴	
3	1603	A	川田、笹間、山岸、山田、増岡	世界と日本を比べる	
4	1603	B	依田、濱野、村尾、三田、吉沼、千村	若年層と中年層の自殺の自殺数の違いは何が関係しているか	
5	1603	B	根本、有村、榎本、原田		
6	1603	B	佐藤、小林、中村		
7	1603	C	唐沢、入野、大澤、堤、岡田	自殺によってもたらされる影響や自殺防止策がわかっているか	
8	1603	C	佐藤、榎本、細井、久野、福原	年代別による実の原因と実態	
9	1603	C	山口、浅井、鈴木	日本と海外の自殺率を比べて	
10	1603	D	古賀、岡本、三塚、高橋、鳥田		
11	1603	D	片山、榎園、佐伯、山口、菅井	年代別の自殺要因	
12	1603	D	新城、飯島、森谷、伊藤、岡安	なぜ自殺は起きるのか～その原因と結果～	
13	1603	E	武井、高橋、篠崎、郡司	様々な視点から見た自殺の実態	
14	1603	E	水野谷、小倉、佐々木		
15	1603	E	神藤、浅間、高村、西口	自殺の原因について	
16	1603	F	高島、山口、阿部、武田、佐藤	年代別にみる日本人の自殺率の増加の原因と実態	
17	1603	F	水澤、小林、桑山、大塚	日本に自殺が多い社会的背景	
18	1603	F	阿部、村上、高橋、飯島、濱田	なぜ自殺は起こるのか	
19	1603	G	中尾、千葉、荒井、久保、渡辺	自殺者の年齢層と時期と時間帯について	
20	1603	G	内田、山下、岡本、大戸、富	日本における自殺の特性と要因	
21	1603	G	齊藤、大谷、大森、高寺、熊川	様々な要因からみた自殺の実態	
22	1603	H	中野、飯田、千徳、泉	自殺者の自殺理由と健康問題について	
23	1603	H	平川、江副、中野、露木、八幡	未成年者と成人の自殺の比較。また、日本とアメリカでの自殺の実態	
24	1603	H	佐藤、宇田川、小倉、片岡	自殺はなぜ起こるのか	
25	1601	I	加藤、山下、倉吉、重野	年齢階級別の自殺の実態と原因の分析	
26	1601	I	田中、今井、渡邊、原	増えつつあるいじめによる若者の自殺	
27	1601	I	高橋、穴澤、中島、及川		
28	1601	J	四十万、柳生、木村、後藤		
29	1601	J	露木、馬場、加藤、川島、小池	各分野における自殺対策の現状と課題	
30	1601	J	青山、鎌田、堀川、山下、佐野	自殺者数の推移からわかる自殺対策の現状とそこから見る課題	
31	1601	K	大島、二石、前田、岡山	私たち一人ひとりが自殺予防の主役となるように。	
32	1601	K	町島、細村、木下、吉水	若年労働者に対する自殺対策の現状と対策	
33	1601	K	尾崎、陳、細田、田口、金子		
34	1601	L	三澤、丸川、松本、遠藤	自殺と生命保険にはどのような関わりがあるのか	
35	1601	L	紺野、富岡、岩崎、浅見	生命保険金が支払われる理由	
36	1601	L	一瀬、近藤、切中、大竹、岸本	生命保険会社の自殺に対する危険選択について	

3 LMS を活用した授業理解力の向上

菅野正泰

① 当該授業名

コーポレート・ファイナンス、ファイナンス、統計学、確率・統計など前任校等での授業（一部、現任校のコーポレート・ファイナンス1・2でも実施）

② おおよその参加学生数

科目により、受講者数：50名～300名

③ 目的

- 受講生への連絡
- 講義資料の配布
- レポート課題の提出・管理
- 演習問題の実施

④ 事前準備・必要機材等

- LMS (Learning Management System: 学習管理運営システム)
- LMS への受講学生データのセットアップ
- LMS の学生への使用方法の案内 (初回授業で)。前任校では、LMS 開発会社のインストラクターに依頼したときもあります。
- LMS への登録教材 (ネットテスト等)

⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

- 受講生への連絡

【教員】 LMS のお知らせ機能を使って授業連絡する。いつでも、どこからでも連絡可。授業内容の周知、急な変更があった場合等に便利。

- 講義資料の配布

【教員】 LMS に講義教材 (PPT のスライド, エクセルシート) を授業の前に登録。

【学生】 講義前にダウンロードして、必要に応じて印刷。

- レポート課題の提出・管理

【教員】 レポート課題を作成して LMS にアップ。

【学生】 期限まで、いつでも、どこからでも電子ファイルを LMS 経由で提出可能。

【教員】 全体および個別の提出状況をシステムで閲覧可能。未提出者に提出するよう促す。

【教員】 提出されたファイルを一括もしくは個別にダウンロードした後、ファイルをクリックして読んで採点。LMS の画面上で、ワンクリックでファイルを開き読んだ後、LMS 上でそのまま採点する場合もある。採点後は一覧でチェック。

【教員】 LMS 経由で評価をフィードバック。

【教員】 期末成績評価時にレポート課題の採点表 (LMS で自動作成) を利用。

- 演習問題の実施

【教員】 LMS の言語・アプリケーションで問題を作成。自身が使っていた LMS は、特殊なアプリであったため、ICT 補助スタッフ (外部より大学が雇用。商学部と同程度の学生数を要するキャンパスで 2 名程度常駐) に作成を依頼。

【教員】 LMS に問題ファイルをセットアップ。タイマーにより、解答時間を設定。

【教員】 授業で該当箇所を講義。課題として、LMS の問題を翌週までに解くように指示。

【学生】 解答期限まで、いつでもどこでも解答可能。

【教員】 翌週、レポート課題の板書による解説。

⑥ 実施する上での留意点

演習問題の得点を平常点として配点もしくは成績不芳時のプラスアルファとすることで、学生に復習するインセンティブを与える。

## ⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

## ● 講義資料の配布

教員が講義資料を印刷・配布する負担を軽減。

大規模授業（100人超）では特に有効。

## \* 「商学部共有フォルダ」の問題点

そもそもシステムではないので、受講生管理、ファイルのバージョン管理、セキュリティ管理等ができない。

外部からアクセスできないため、わざわざ大学に来ないと資料を入手できない。

⇒ 学生の不満が聞こえてくる。

## ● レポート課題の提出・管理

紙での処理は教員・学生双方に負担大。

特に大規模授業では、教員の採点・得点処理の負担が大きい。そのため、レポートを平常点として配点することが困難。

## ● 演習問題の実施

演習問題の取り組みを成績評価に入れることで、半強制的に復習する環境を学生に提供することが可能（学生の自発的な復習を期待するのは困難）。

計算問題等、学生が自ら手を動かさなければ、身に付かないような場合に特に有効。

## ● その他機能

受講者への連絡、アンケート等、授業を実施する上で基本的な機能を利用することが可能。

## 4 LMS Glexa による学習管理—経済統計学 1・2 の事例紹介—

芝 村 良

## ① 当該授業名

経済統計学 1・2

## ② おおよその参加学生数

例年の受講者数は、経済統計学 1 が 120 名、経済統計学 2 が 100 名である。いずれも、抽選後の人数である。PC 教室（48 人定員×2 教室を使用）で実習を実施する関係で、例年抽選を行っている。

## ③ 目的

2015 年度後期より LMS (Learning Management System) Glexa を活用したブレンド型講義を実施している。その目的は、統計分析の Excel 課題（計 3 回）の「成績」と「受講姿勢の相対評価」の 2 点について、担当教員から各受講生に対して随時フィードバックすることによって、受講生一人一人に、途中時点での「理解度」と「自分の学び方」の良し悪しについて自己点検させることである。このことによって、（特に成績下位層の）学習意欲を向上させ、能動的・自律的学習に導くことが期待できる。

## ④ 事前準備・必要機材等

(1) LMS Glexa

(2) Excel 課題、課題の解答、課題の解説コンテンツ

- (3) 受講生のログインID・パスワードの設定
- (4) 受講生用のLMS Glexa操作マニュアル

### ⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

本講義では、14回の講義のうち、10回を通常教室における講義にあて、残り3回をPC教室における統計分析実習にあてている。具体的なLMS Glexaの活用方法としては、①Excel課題の受講生への配布(図1参照)と完成した課題の受講生から担当教員への提出、②課題解答例(正解)の配布と課題の解説ページ(図2および図3参照)、③課題の成績・受講姿勢の相対評価の通知(図4参照)、の3つである。タイムラインについては、図5の通りである。

課題は提出期限後1週間で採点して、受講生ごとに各自の点数と平均点について通知する。本講義の課題では、統計的方法を用いた計算だけではなく、分析の結果を解釈させる記述問題を多く出題している。正解が決まっている問題であれば、LMS Glexaのシステムに自動的に採点させることができるが、論述問題のように正解が決まっていない問題の場合は、教員による採点が必要であるために、本講義では担当教員が採点を行っている。

受講姿勢の相対評価については、出席状況、授業の受け方、疑問点の解消方法、といった受講姿勢についてLMS Glexa上でアンケート(図6～図8参照)を行ない、全受講生に課題提出時に回答させている。彼らに正直に回答させる工夫として、このアンケートの回答内容が成績評価には一切影響しないことを、また回答率を高める工夫として、未回答の場合は平常点を減点することを、それぞれ受講生に説明している。受講姿勢のアンケートでは、回答する選択肢ごとにそれが学習上望ましい回答であるほど点数が高くなるように配点しておき、各受講生の点数をLMS Glexaに自動採点させる。その点数をもとに受講生一人一人を担当教員がA(上位25%以内)～D(下位25%以内)の4段階で相対評価する。

上述したように課題の成績と併せて受講姿勢の相対評価についても通知する理由であるが、各自の「課題の成績」≠「講義内容の理解度」を、「各受講生の能力」の結果としてではなく、「受講姿勢」という各受講生の「学び方」の結果として認識させるためである。近年、私が講義を通じて感じているのは、大学生としての本来の学び方(考えながら話を聞いて能動的にノートを取る、分からないことを専門書で調べて考えてみる)を知らず、さらには自分の学び方が適切かどうかを意識すらせずに受講しているように見受けられる学生が増えていることである。特に成績が下位の学生にその傾向が強いように感じられる。そこで、受講姿勢を相対評価することによって、①各受講生の受講姿勢を受講生全体のそれに位置づけて通知することによって、大学生本来の学び方をしている受講生が「意外に」多いことを知らせること、また、②講義内容の習得には大学生本来の学び方を実践することが必要であることを理解させること、の2点を本教材の狙いとした。なお、受講姿勢の相対評価の通知については、各自の相対評価順位の通知と併せて、全体の回答分布についても公表している(図9参照)。


最後に、2015年度後期に開講した経済統計学2の受講生の成績データを分析した結果を紹介する。図10は、3回の課題を全て提出した85名の受講生の成績を分類したものである。課題ごとに平均点が異なるため、各受講生の課題の点数を偏差値化した上で、A(上位25%以内)～D(下位25%以内)の4段階で相対評価した。例えば、図10の左端の棒(度数は9名)は、課題①の成績がAであった者のうち課題②と課題③の成績もAであった受講生数を示している。図10のうち、課題①で成績がDまたはCであった受講生についてその後の成績の推移についてまとめたものが表1である。表1からは、課題①で成績が下位50%以内に位置した受講生のほとんどが、課題②以降で成績順位を改善させたことが明らかとなった。つまり、成績のみをフィードバックするよりも、成績の原因となっている受講姿勢についても受講生にフィードバックする方が、その後の講義内容の理解度を高める上で有効であると言える。


以上のように、本講義では、従来型の講義が主体であり、LMSの活用はあくまでも補助的な程度に留まっています。それでもLMS Glexaは有効なツールであると実感している。

図1 課題配布と提出のページ

(1) 第1回課題の入手

第1回Excel実習の課題ファイル(第1回課題2015年度.xls)をダウンロードしてください。ダウンロード後は、大学や自宅などのPCを使って課題を完成させてください。

 第1回課題2015年度.xls

 (3) 第1回課題の提出




実際の課題提出はここから行ってください。

下の「受講する」をクリックして第1回課題のファイル(第1回課題2015年度.xls)を提出してください。提出期限は2015年10月15日(木)18:00です。提出が完了すると、10点が付与されます。(ただし、この点数は提出完了を確認するための点数であり、実際の平常点とは関係ありません。)

締切期限までであれば、一旦提出した課題ファイルを別のファイルに更新することが可能です。ファイルを更新したい場合は、下の「受講する」をクリックして、別のファイルをアップロードしてください。

**受講する**

図2 課題解答例(正解)の配布と課題の解説ページ

教材名
<p>(1) 第1回課題の解答例</p> <p>第1回Excel実習(10月9日実施)の課題の解答例をダウンロードしてください。解答例をみる際には、(2)第1回課題の解説もあわせて活用してください。</p> <p> 第1回課題解答例2015年度.xls  ダウンロード済み</p> <p> (2) 第1回課題の解説</p> <p>この解説ページを受講する際は、解答例または自分の解答を画面の半分に表示して、画面の残り半分はこの解説が表示されるようにすると良いでしょう。下の「受講する」をクリックしてください。</p> <p>解説ページは5ページあります。1ページ読み終わったら、必ずページの一番下にあるチェック欄「次のページに進む」をクリックして、次のページに進んでください。(チェック欄をクリックせずに、次のページに進むと、「不正解」と表示されて次のページに進めません。)</p> <p style="text-align: center;"><b>受講する</b></p>

⑥ 実施する上での留意点

- (1) 通年で1回・10分程度，LMS 操作方法について説明する必要がある。
- (2) LMS 操作方法の簡単なマニュアルを作成・配布する必要がある。
- (3) 担当教員が受講生一人一人について相対評価の順位付けをし，また成績を個別に通知するために，1回の課題毎に2時間程度作業することが必要となる。この手間の問題は，LMS Glexa の仕様を将来的に変更して「自動化」することができれば解決する。

図3 課題の解説ページ例



図4 課題の成績・受講姿勢の相対評価の通知

(2) 第1回課題の成績と受講姿勢の相対評価の「成績を見る」をクリックする。



表の右端の教員からのコメント欄を見る。

ページ	問題番号	問題	正解	解答	採点結果	教員からのコメント
1	提出の練習	以下の手順で課題を提出してください。	-----	file--	5点	課題A 姿勢B

課題: 第1回課題の成績(100点満点換算) **平均点 61.2点**

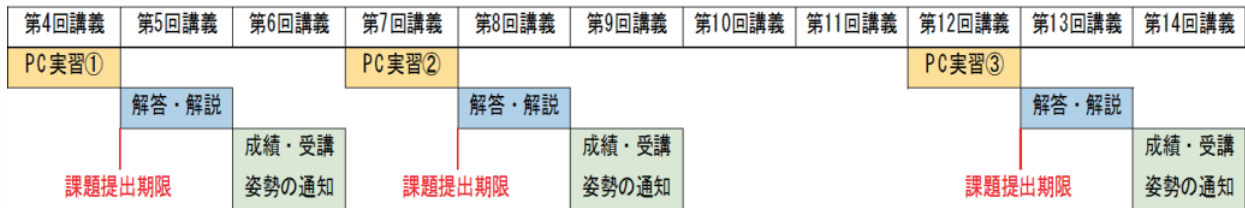
A) 75点以上, B) 50点~74点, C) 25点~49点, D) 24点以下, 未) 課題未提出: 空送信を含む **※B以下は要復習**

姿勢: 受講姿勢を修了確認アンケートから相対評価

A) 上位1~25%, B) 上位26~50%, C) 上位51~75%, D) 上位76~100%, 未) アンケート未回答

図5 タイムライン

経済統計学2 2015年度後期



経済統計学1 2016年度前期

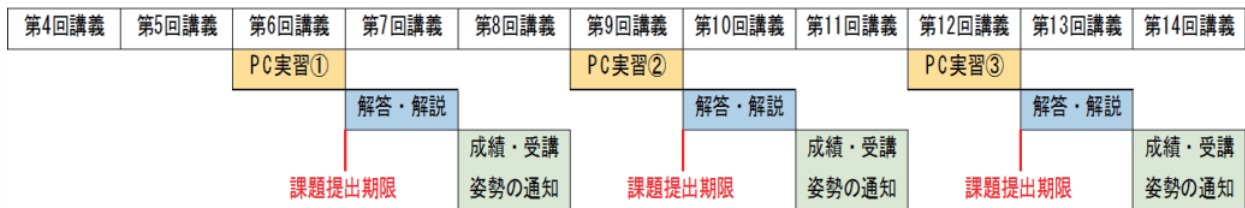


図6 受講姿勢のアンケート項目①

- 質問1 今回の課題の出来はどうでしたか？  
 アバウトなイメージで良いので100点満点で自己採点して、  
 以下から最も近い点数を一つ選んでください。
- 0点
  - 1点～25点
  - 26点～50点
  - 51点～75点
  - 75点～99点
  - 100点
- 5点
- 質問2 第2回課題の内容は、第5回講義と第6回講義の範囲から出題しました。  
 あなたは第5回講義と第6回講義に出席しましたか？  
 以下の選択肢から、当てはまるものを一つ選択してください。
- 第5回講義・第6回講義ともに出席した。
  - 第5回講義だけ欠席した。
  - 第6回講義だけ欠席した。
  - 第5回講義・第6回講義ともに欠席した。
- 5点

図7 受講姿勢のアンケート項目②

- 質問3 第2回課題の内容は、第5回講義と第6回講義の範囲から出題しました。あなたは第5回講義と第6回講義にどのような姿勢で臨みましたか？以下の選択肢から当てはまるものを全て選択してください(複数選択可)。
- 配布資料の空欄を埋めることはもちろん、教員の口頭説明で重要だと思ったこともメモ書きした。
  - 配布資料の空欄を埋めることだけを頑張って、教員の口頭説明をメモ書きすることはしなかった。
  - 講義でよく分からなかったことを統計学のテキストなど書籍で調べてみた。
  - 講義でよく分からなかったことを教員に質問してみた。
  - 講義でよく分からなかったことをインターネットで調べてみた。
  - 講義でよく分からなかったことをよく分からないまま放置した。
  - 講義でよく分からなかったことは何もなかった。
- 7個までチェックできます 15点
- 質問4 第2回課題に取り組む際に生じた疑問をあなたはどのように解消しましたか？以下の選択肢から当てはまるものを全て選択してください(複数選択可)。
- 実習の時に教員に質問した。
  - 実習の時に補助学生(ティーチング・アシスタント)に質問した。
  - 統計学のテキストなど書籍で調べてみた。
  - 講義資料で調べてみた。
  - インターネットで調べてみた。
  - 疑問点はあったが、それを解消することは何もしなかった。
  - 課題は簡単だったので、疑問点は何もなかった。
- 7個までチェックできます 15点

図8 受講姿勢のアンケート項目③

- 質問5 第1回課題の締め切り後に、第1回課題の成績とそれまでの受講姿勢について評価して、受講生一人一人に通知しました。その通知への対応として、あなたに当てはまるものを以下の選択肢から全て選んでください(複数選択可)。
- 通知内容を参考にして、第1回課題の出来や自分自身の課題への取り組み方について振り返ってみた。
  - 通知内容を参考にして、これまでの自分自身の受講姿勢を振り返ってみた。
  - 受講姿勢、課題のどちらとも通知内容を参考にして振り返ることはしなかった。
  - 通知内容をまだ確認していない。
  - 第1回課題を提出していないために通知を受けていない。
- 5個までチェックできます 6点



図9 受講姿勢アンケートの回答分布

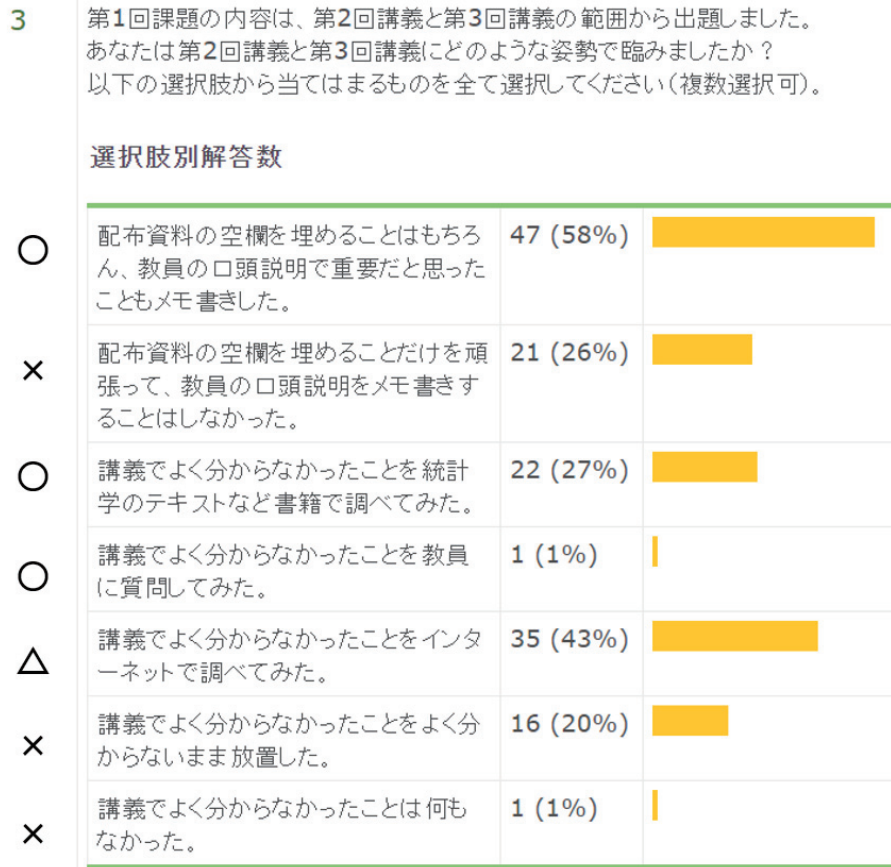


図10 3回の課題の成績分布 (グラフ下のAA, AB, ..., DDは、課題②と課題③の相対評価を意味している)

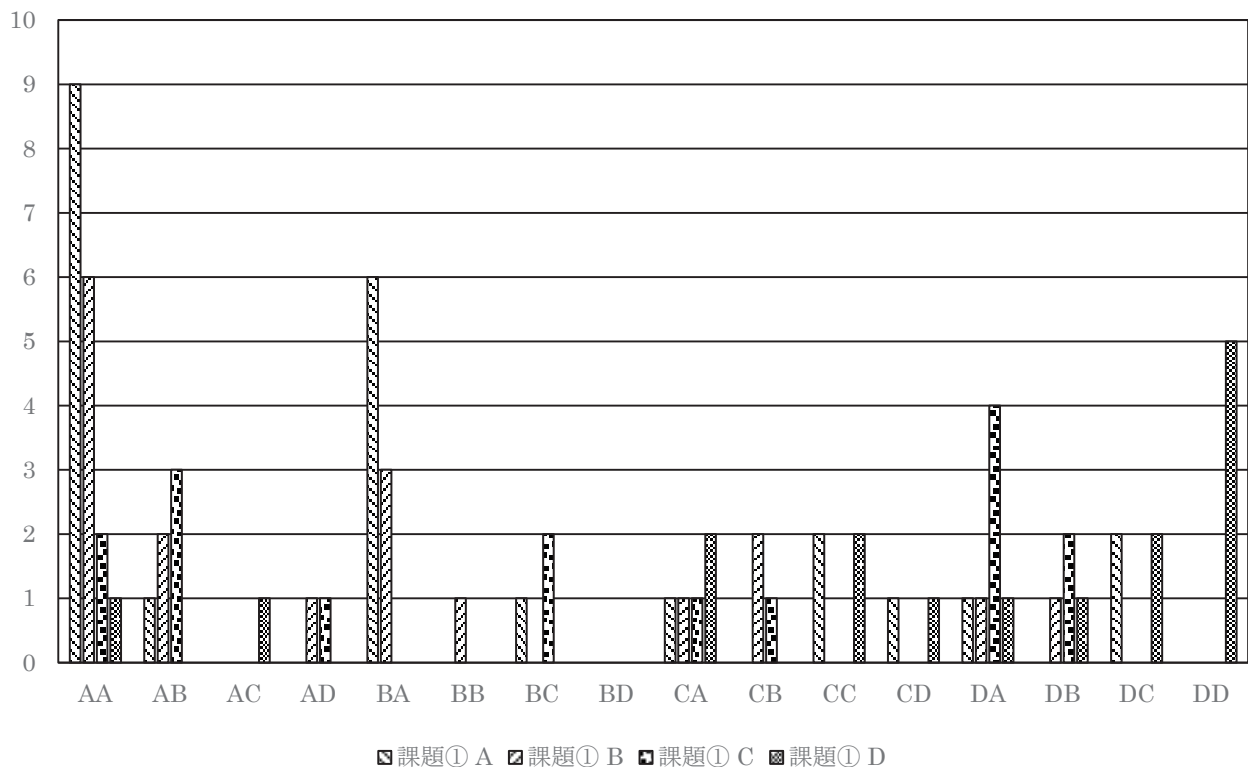


表1 2015年度経済統計学2の成績データの分析

【課題①で成績D】・・・16人		
課題②以降も全てDの評価	5人	31.3%
課題②以降は成績が上昇した者	11人	68.7%
うち		
課題②以降は全てC以上の評価	6人	54.5%
課題②以降、1回以上AまたはBの評価	8人	72.7%
【課題①で成績C】・・・16人		
課題②以降、全てC以下	0人	0.0%
課題②以降、一度もDにならなかった者	10人	62.5%
課題②以降、1回以上AまたはBの評価	16人	100.0%
うち		
課題②以降は全てAまたはBの評価	5人	31.2%

## 5 eラーニングによるリメディアル教育（数学A）

竹村 亮

### ① 当該授業名

数学A（基礎数学）

### ② おおよその参加学生数

受講者約80～100名

### ③ 目的

#### ● リメディアル教育

高校での既習事項で本授業に必要な基礎的知識（授業で扱うまでもないが苦手な学生が一定数いる項目）の復習。

（式の展開・1次方程式・連立方程式・不等式・平方完成・因数分解・分数の計算・平方根・指数対数・基礎的微分計算）

#### ● 上記の基礎知識を前提として、授業では文章題・応用問題・経済学への応用を講義・演習形式で行ったり、アクティブラーニング型授業を展開する。

### ④ 事前準備・必要機材等

- eラーニングシステム（LMS）
- eラーニング教材（簡単な解説と練習問題）
- 学生へのログインID・パスワードの配布

### ⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

#### ● 〔前回授業〕

上記の前提知識が必要となる前の回の授業で、eラーニング課題を使って復習しておくように指示する。できる自信があるのならやらなくても良いとする。（任意課題。成績には無関係。）

当日授業の演習（挙手制・演習点あり）で、前提知識の不足が原因で計算に時間がかかりすぎたりできなかつたりした場合には演習点は無し。

- [授業前]  
各自 eラーニングで授業外学習。(一応、紙の課題プリントも配布するが、解答は配布していない。(eラーニングでは自動採点で解答表示。))
- [当日授業中]  
授業の最初にプリントを1枚配布し、10分間でeラーニング課題を含めた前回の復習を各自で行う。(小テストのような形式。回収はしない。授業でやった問題やeラーニング課題であり、プリントやノートを見れば分かるため、基本的には質問も受けない。答え合わせもしない。友人どうし相談も可(むしろそれを望む。)) (授業の終了も10分間延長する。5時限目なので可能。)  
講義および挙手制による演習。講義ノートには約1000問(多分)の練習問題が載っており、演習で行う練習問題は例題と同じような簡単な計算問題で、毎回延べ100人程度が当たる。一度に4~8人を当てる。同一の問題に複数人を当てる場合もある。演習の目的は正解を書くことではなく、その場で解法や概念を理解することであり、その場で質問を受けたり、間違いを指摘したりする。演習中は周りの友人との相談も可。演習後は、多くの学生が間違えるような注意点は解説するが、全体に向けての厳密な答え合わせは通常はしない。

#### ⑥ 実施する上での留意点

- 現在はeラーニング課題は「自主課題」(やってもやらなくても成績には影響しない)としているが、授業中の演習でも基本的な計算ができていない学生もいる。そのような学生に対する対策としては、後からシステムで確認して、その回の演習点を無くす等の対応も可能。
- モチベーションを高めて課題受講者を増やすためには、eラーニング課題を何時間勉強して、何点とったか等をLMSで確認して、演習点や平常点として加算することもできる。

#### ⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

- 電車の中でもスマホで勉強できる。(結果的にはPCで受講する学生が多い。)
- 繰り返し復習できる。(2, 3回繰り返す学生もいる。)
- 授業では応用・発展問題に集中できる。
- アクティブラーニング型授業を展開する時間を確保できる。
- 最初のeラーニング教材の作成がたいへんだが、一度作成すればずっと使える。
- 採点の必要がない。(自動採点)
- eラーニングによる確認テスト(300問からランダムに30問出題)で到達度を測れる。
- (4年生の)救済措置として使える。
- (5分くらいでできる)簡単な問題を用意して、授業内の適当な時にアクセスさせて解かせれば、出席確認や小テストにも使うことができる。ただし、スマートフォンを持っていない学生への対応は必要。
- 講義を撮影し、動画教材として配信することもできる。
- 学習管理ができる。(いつ、どのくらい教材にアクセスしたのかのデータ。)

なお、来年度からeラーニングによる小テストを行う予定である。応用に入る前の基礎部分が終わる段階で、1週間限定で公開し、80点以上で演習点を加算する。半期で3回程度行う予定。

eラーニング教材例 (平方完成)

5-1-平方完成

ページ: 1 / 3

$y = ax^2 + bx + c$  という形の一般の2次関数の頂点を求めるためには、この式を  $y = a(x + p)^2 + q$  という形に変形すればよい。  
 この形なら頂点も求めることができ、グラフも描ける。  
 このような式変形操作を、平方完成とよぶ。

(注)変形する形は、 $y = a(x + p)^2 + q$  でも、 $y = a(x - p)^2 + q$  でも同じことである。

(例)  $y = x^2 + 4x + 1$  を平方完成してください。

方法1(パズル式)

1. 目標は、 $y = x^2 + 4x + 1$  を  $y = (x + p)^2 + q$  の形に変形すること。
2.  $y = x^2 + 4x + 1$  の下線部分( $x$ を含む部分)に注目する。  
 ここを、 $(x + 2)^2$  という形に変形したい。

$$\begin{array}{ccc} x^2 & + & 4x \\ x \text{ をとる} \downarrow & & \downarrow x \text{ をとって} \\ (2 \text{ をとる}) \downarrow & & \downarrow 2 \text{ で割る} \\ & & (x + 2)^2 \end{array}$$

3. まず、下線部  $x^2 + 4x$  の  $x^2$  の指数2をとって  $x$  とする。

以下の関数を平方完成してください。

1  $y = x^2 - 2x = (x + p)^2 + q$   
 $p = \text{[ ]}$  ,  $q = \text{[ ]}$   
 10点

2  $y = x^2 + 4x + 10 = (x + p)^2 + q$   
 $p = \text{[ ]}$  ,  $q = \text{[ ]}$   
 10点

3  $y = x^2 - 4x - 1 = (x + p)^2 + q$   
 $p = \text{[ ]}$  ,  $q = \text{[ ]}$   
 10点

4  $y = x^2 - 3x = (x + p)^2 + q$   
 $p = \text{[ ]} / \text{[ ]}$  ,  
 $q = \text{[ ]} / \text{[ ]}$   
 20点

5  $y = x^2 - 2x + 10 = (x + p)^2 + q$   
 $p = \text{[ ]}$  ,  $q = \text{[ ]}$   
 10点

6  $y = x^2 - 3x + 2 = (x + p)^2 + q$   
 $p = \text{[ ]} / \text{[ ]}$  ,  
 $q = \text{[ ]} / \text{[ ]}$   
 20点

## 6 eラーニングシステム Glexa を用いた日本語アカデミックライティング

服 部 訓 和

### ① 当該授業名

文章表現1 (アカデミック・ライティング)

### ② おおよその参加学生数

30名 (抽選)

### ③ 目的

- 初年次教育の一環をなすスキル教育科目。1クラス30名上限、共通シラバス。
- 原則として初年次対象だが、2年次以上対象のクラスが3クラスある。
- リポートや論文を執筆するうえで必要となるさまざまなスキル、および基礎的な文章力 (ロジカルシンキング等を含む) を身につけることに加え、身につけたスキルを今後の4年間の学修の中で活かしていくことを目標とする。

### ④ 事前準備・必要機材等

- eラーニングシステム (LMS) およびeラーニング教材 (準備時間0分～)
- クラスの作成・学生登録・PC変更等の指導・練習問題作成
- 学部PCで作業可能
- 個人HP

### ⑤ 具体的な実施方法・手順・手続き

予習課題 … 授業での学びの前提となる課題 (Ex. 事前に文章を書く→講義→修正)

出席作文 … 毎時間、簡単な問いを発し、短い文を書く (Ex. 日大商学部の良いところ)

練習問題 … 授業内容を踏まえた確認・応用問題 (Ex. 文献表記・注記等)

課題問題 … 授業内容の理解度テスト・課題提出 (Ex. 作成した課題のファイル提出)

相互批評 … フォーラム機能を利用したリアルタイム相互批評 (Ex. 文章をフォーラムに挙げ、相互にコメントを書く/全体で課題を共有)

個人HP … 文献検索の方法や検索リンク集を公開 (Ex. 図書館での資料収集ミッション)

### ⑥ 実施する上での留意点

- 学生のPCスキルに差があるので、最初に利用する際には指導が必要 (一度でOK)。
- あくまで対面での指導および直接の添削がメインであり、それを補うものとする。添削や対面指導にかかるコストを確保するために、LMSに任せられること、任せの方が良いことは任せという考え方。

### ⑦ 学生および教員にとっての利点・難点

《学生》

(1) スキル項目等を中心に、確認や復習が容易になる (文献表記、注記の方法等についての練習問題作

成／資料のDL)

- (2) 欠席した際に授業から脱落する可能性が減少する (講義ビデオ等の参照 (未実施), 配布資料ダウンロード)
- (3) 学修, 課題提出が, いつでもどこでも何度でも可能になる (文章などは自宅で書き, 情報教室で提出し, 授業に出席するといった流れ)
- (4) 成果物のアーカイブ／ラーニングポートフォリオ (提出した成果物や課題等が一括で管理されるので, 学修成果を可視化・保存できる)

→学修機会の増大・単位取得率向上

#### 《教員》

- (1) 成果物・成績管理が容易になる (ファイル提出によるレポート一括管理／エビデンス)  
→教務課の事務量減少にも効果
- (2) 成績評価が容易になる (成績・出席等が保存され, 設定次第でさまざまに自動的に得点を付し, 集計できる・・・提出ファイル等は, 自動的にファイル名・提出日時が付される／一括ダウンロード可)
- (3) 資料配付・共有が容易に (資料をLMS上でダウンロードしておくだけ)
- (4) 学修管理 (学生の学修時間や学習状況, 到達度を, リアルタイムで把握)
- (5) 課題の管理, 製作・修正, 再利用, 共有等がLMS上で一元化
- (6) 個別の学生に個別のファイルを返却することができない (改善予定)  
→指導方法の選択肢拡大・留年生減少

追加を計画しているLMSプラグイン (未確定: 2016年11月現在)

- (1) 学生マイページ (学生が自身の学習記録や成果物, 点数や成績等をふり返る)
- (2) レポートプラグイン (紙媒体ベースの課題等もPDF化して蓄積可能に)  
+ 授業支援ボックス (紙をスキャン→PDF化して蓄積→個人自動識別・返却)
- (3) ポートフォリオ／学生の活動記録 (オリジナルのフォームを作成し, 活動の記録・蓄積ができる／一覧の自動出力)
- (4) ポートフォリオ／ルーブリック評価機能 (評価基準の明確化・可視化)

【追記】上記追加予定項目のうち, (1) 学生マイページ, (3) ポートフォリオ／学生の活動記録, (4) ポートフォリオ／ルーブリック評価機能については, 日本大学理事長特別研究「自主創造型パーソン」の育成を目標とした全学共通教育における効果的なアクティブ・ラーニング開発に関する研究—学部横断型教育の実現と中途退学者防止対策を含む学修支援体制の構築について— (2016: 研究代表=近藤健史) における研究活動の一環として, 2016年12月に導入された。その結果として, 「個別の学生に個別のファイルを返却することができない」といった上記改善項目の一部はすでに改善されている。

## むすびに

本稿で紹介した授業方法は、大人数授業に限らず、少人数授業であっても適用可能なものである。もちろん、すべての授業で同じようなアクティブラーニング型授業を行うのが良いとは思わないし、世間一般に言われているような形のアクティブラーニング型授業を展開する必要があるとも思わない。それぞれの授業内容に応じた適切な授業方法があるものと思われる。しかしながらたとえそうであっても、半年ないし1年間の授業で、学生が自身で考え学ぶ機会が一切必要ないような授業は無いのではないだろうか。たとえどんな授業であっても、そのような機会を作り出す、効果的に活用するために、ここで紹介した授業方法がなんらかのヒントになるのではないだろうか。

ここに掲載した資料は、誰にでもやる気さえあればすぐにでも真似できるように、という観点からできるだけ詳しい実践方法を中心に作成した。今回の講習会および上掲の資料が、大学教育・授業のあり方について再考する契機となれば幸いである。

## 引用・参考文献

- Bonwell, C.C., & Eison, J.A. (1991) "Active learning: Creating excitement in the classroom". ASHE-ERIC Higher Education Report. No. 1.
- 服部訓和 (2016) 「LMS の導入と評価: 日本大学における eラーニングの戦略的活用の研究 (商学部パイロットプログラム)」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 301-328.
- 福田弥夫, 関根二三夫, 池田実, 成毛信男, 鬼頭俊泰, 竹村亮, 芝村良, 佐藤健一, 山添謙, 大嶽龍一 (2016) 「日本大学における eラーニングの戦略的活用に関する研究—日本大学理事長特別研究公開シンポジウム開催報告—」『日本大学 FD 研究』第 4 号, 111-127.
- 福田弥夫 (2016) 「日本大学における eラーニングの戦略的活用に関する研究」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 167-170.
- 京都大学高等教育研究開発推進センター編 (2012) 『生成する大学教育学』第 1 版, ナカニシヤ出版, 東京.
- 松下佳代, 京都大学高等教育研究開発推進センター編著 (2015) 『ディープ・アクティブラーニング: 大学授業を深化させるために』第 1 版, 勁草書房, 東京.
- 溝上慎一 (2014) 『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』第 1 版, 東信堂, 東京.
- 成毛信男, 金指崇, 服部訓和 (2014) 「日本大学理事長特別研究入学前教育: TOEIC eラーニング教材の開発とその評価」『総合文化研究』第 19 巻第 3 号, 日本大学商学部, 1-28.
- 成毛信男, 服部訓和 (2016) 「入学前教育: TOEIC eラーニング教材の開発とその評価 II」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 221-258.
- 日本イーラーニングコンソシアム編 (2007) 『eラーニング活用ガイド』第 1 版, 東京電機大学出版局, 東京.
- 日本イーラーニングコンソシアム編 (2008) 『eラーニング白書』2008/2009 年版, 東京電機大学出版局, 東京.
- 大嶽龍一 (2016) 「日本大学における「教育のオープン化」にむけて」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 173-196.
- Prince, M. (2004) "Does active learning work?: A review of the research". *Journal of Engineering Education*. 93 (3). 223-231.
- 佐藤健一 (2016) 「日本大学理事長特別研究パイロットプログラム (2012 ~ 14) eラーニングによる入学前教育の開発研究」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 197-220.

- 芝村良 (2016) 「大学入学前教育のための e-learning 教材の開発と実践—商学・経済学を学ぶための数学 (1)—」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 271-300.
- 竹村亮 (2015) 「LMS glexa を用いた論理学 e-learning 教材の開発」『総合文化研究』日本大学商学部, 第 21 巻第 2 号, 51-72.
- 竹村亮 (2016) 「eラーニングを用いたアクティブラーニングの試み—LMS glexa を用いた反転授業—」『日本大学 FD 研究』第 4 号, 13-26.
- 富永敦子, 向後千春 (2014) 「eラーニングに関する実践的研究の進展と課題」『教育心理学年報』Vol. 53, 156-165.
- 山添謙 (2014) 「日本大学商学部における初年次教育に関する一考察—入学試験形態と初年次前学期の学修活動との関係—」『総合文化研究』第 19 巻第 3 号, 日本大学商学部, 29-45.
- 山添謙 (2016) 「日本大学商学部におけるパイロットプログラム受講者の学修状況」『研究紀要』日本大学通信教育部, 第 29 号, 329-345.